

令和元年度の学校課題研究の成果と課題

1 成果

(1)児童の変容について

①学校生活の中に英語があることが当たり前になってきたことで、英語に慣れ、コミュニケーション手段の一つとして活動することができるようになってきている。

(2)授業づくりについて

- ①授業の展開を「高根スタイル」として共有したことで、教師、児童ともに授業の進め方を理解し、安心して活動できるようになってきた。
- ②必要感のあるアクティビティの設定について研修を行い、授業実践を重ねたことで、教師が目的に合わせたアクティビティの設定をできるようになってきた。
- ③研究主任が中心となり部長と連携を取ることで、児童の実態に即した研究を進めることができた。

2 課題

(1)課題設定に関して

- ①児童が主体的に課題を持てるようにする。
→デモンストレーション等を通して、児童が課題に気付き、自ら設定できるような展開を用意する。
- ②活動目標に終始している部分がある。
→Today's goalは「〇〇しよう」であっても「何のために、誰のために」の目的意識を持たせる。そのために具体的な目的・場面・状況の設定が大切になる。

(2)振り返り、見取りに関して

- ①BESTの意識化が薄い。
→Today's goalや振り返りでの着目のさせ方、また外国語活動の時間内(本時ではBESTのどれを重点とするか、等)だけでなく、他教科や教育活動全般を通して意識させていく。(例:発表、グループ学習、生活目標と関連付けて)
- ②変容の見取り方を改善する必要がある。
→振り返りカードの内容を検討し、本校の課題に沿った、より効果的なものに改善する。

(3)アクティビティに関して

- ①ペアワークの際の組み方をどのようにするか。
→前後左右斜めなどの順番、自由に歩き回る方法、一方は座って待つ方法など、扱うアクティビティにおいて効果的な組み方を考えたい。また、座席の配置も意図的に設定する必要がある。
- ②具体的な場面設定が必要である。
→児童が「あー！あるある」と感じる場面を設定する。また、扱う単位によって場面設定が必要なものなのか、自分の考えを伝える活動がメインなのか、単元の性質から考えて設定する。
- ③アクティビティの設定をどのように考えるか。
→扱うアクティビティの目的、大切にさせたい思い等を教師がもっておく。また、やりとりを行う前の練習としてのアクティビティでは、児童が「もう話せる、大丈夫」と安心して活動できる状態にできるよう、時間の確保が必要である。

令和2年度の学校課題研究の成果と課題

以下は仮説に対する手立てとして、本年度の普通の授業の中で行われた取組である。

仮説1 学習過程を統一した授業を実現すれば、児童は安心して取り組み、進んでコミュニケーションを図るであろう。

手立て：

- ・一時間の授業の流れをパターン化し、児童が安心して取り組めるようにした。
- ・「1 by 1 の疑似的な言語活動でたっぷりという・聞く」、表現に慣れてきたところで「アクティビティへ移り、言語活動を行う」を毎回のパターンを意識した。
- ・ふりかえりカードに必ず一言コメントを入れること、ふりかえりの観点を示すことで、児童が自分の学習を振り返り、意欲的に学習できるようになった。
- ・「聞く」「言う」を何度も繰り返す。
- ・UDの視点から黒板に本時の流れを掲示した。
- ・全体での活動→ペアワーク→みんなの前で発表、と段階を踏む。
- ・振り返りシートを提出する時に、毎回1 by 1 を行い、表現が身についているか確認できた。
- ・英単語を増やしていけるような歌を入れた。
- ・前時の内容を残しつつ、少しずつ新しい内容を足していくようにした。
- ・授業の導入で毎回 Let's Sing と Let's Chant に取り組み、児童に発音させることで英語を喋ることへの抵抗感をなくすようにした。また、そこで聞こえた単語を毎回聞いた。併せて、AETのネイティブな発音を聞くことで正しい発音を知ることができた。
- ・Small Talk で教師と AET でデモンストレーションをし、どんな様子かを児童に考えさせた。
- ・Today's goal は黒板に明示し、折に触れて振り返った。
- ・Look-back では、黒板にある例を参考に書かせたり「今日出てきた外国の祝日の中で体験してみたいものは？」など特別に指示を出したりした。

仮説2 目的・場所・状況を設定した生活に即した対話的な活動（アクティビティ）を取り入れれば、児童は進んでコミュニケーションを図るであろう。

手立て：

- ・「クリスマスケーキに盛りたいフルーツを言ってみよう」としてフルーツを言う活動を行った。
- ・場面や状況の設定は難しかったが「楽しくゲームを進める為にこの言葉を言えるようになりたい」という気持ちを刺激するようにした。勝ち負けに終始せず、言語を大切に扱うことを意識した。
- ・フェイスシールドを活用して1 by 1 やペアで会話する活動を取り入れた。I want でカードを作る活動では、自分の欲しい形と色を覚えて、進んでコミュニケーションをとることができた。
- ・I like～. は「なぜ好きか」が話題として気になるものなので、日本語で説明することにした。
- ・Activity では、フェイスシールドを使って対話、軍手でハイタッチなどを行った。
- ・単元内容は、6年生の実態に合ったもので構成されている。6年間過ごした学校での思い出の場所を振り返ったり、買い物をするときを使う英語についての学習だったり和生活に則したものとなっている。1 by 1 やグループトークでそれらに取り組むことで、進んでコミュニケーションを取ることができるよう意識して設定した。
- ・まず担任が表情豊かに発信することを意識した。時には児童が「先生、間違っただ！」と思うことも行った。そこから安心して声を出せる雰囲気づくりを行った。
- ・授業ではないが、朝の会（週に1度<水曜日>）で日付、曜日を日直が英語でいう。健康観察を英語でやるようになった。

1 成果

(1) 児童の変容について

- ①内容を推測して聞いたり、繰り返し表現を使ったりすることで、児童の耳が慣れ、聞き取れる言葉が増え、表現力が育った。
- ②AETの発音を聞くことで、意欲的に英語を話すことに取り組むことができ、英語での言い方が分からなくても、担任やAETに確認しながらコミュニケーションを図ろうとする姿が見られた。
- ③毎時間 Song を行い、みんなで楽しく歌うことで、英語に対する抵抗感を減らすことができ、回を追う毎に聞こえる単語が増え、初めて聞いた歌でも聞き分けられる単語の数が増えた。

(2) 授業づくりについて

- ①1by1 など疑似的な言語活動を踏まえた上で、ペアワーク等の言語活動へ移るなど、段階的にアクティビティを取り入れることで、授業の流れが分かり、児童も安心して取り組んでいた。
- ②授業の流れに沿ったふりかえりの視点を具体的に示すことで、できたこと、難しかった表現、次はこうしたいなど、具体的な記述が増え、学びが深まった。
- ③児童の生活に則した活動を取り入れることで、学級での指導内容と合わせやすく、児童の学習への意欲も高まり、進んでコミュニケーションを図ることができた。
- ④ペアで相談したり教え合ったりして進める活動を行い、分からないところはお互いに確認し合ったり他の児童の真似をしたりすることで、理解を深め、安心して活動できる児童が増えた。

2 課題

(1) 言語活動、疑似的な言語活動に関して

- ① 1by1 の聞く時間の目的意識を持てるようにする。
 - 「繰り返し聞くことで少しずつ表現を覚え、使えるようになる」ことの意識付けをする。
 - 同じ意見の人には「Me too!」と反応したり、友達の意見に対して「That's nice!」など感想を言ったりする活動を入れていく。
- ②終わった単元の話し方を、後日確認すると忘れていることが多い。
 - Small talk などの言語活動を通して、既習表現を使ってやりとりする場面を設定する。

(2) アクティビティに関して

- ①Song の工夫をする。
 - 単元の流れを考慮しつつ、身近な洋楽を取り入れるなど、児童の意欲をさらに高められるような工夫も考えられる。初めから歌詞を配るのではなく、たくさん聞かせ「何と歌っているのかな?」「聞こえた言葉はある?」考えさせる。
- ②低学年の目的・場面・状況をどのように設定するか。
 - 中学年との系統性を意識した活動、自分たちの生活に結び付けられるような活動を取り入れる。声を出したり関わってみようかなと思ったりできる「英語が好きになる」活動を意識する。また、ゲームに終始せず「言語を大切に扱う」ことを意識した活動を取り入れる。

(3) 次年度への引継ぎ

- ①授業の流れを次年度の担当のために残す。
 - 本年度の「本時の展開」をメモとして残しておき、ファイリングする。作った教材は国際理解ルームに保管する。データは「国際理解教育」フォルダへ保存し、誰でも使用できるようにする。